

円環イメージ画の描画を拒否した青年の母子・父子関係の特徴

五十嵐 哲也*
庄 司 一 子**

1. 問題と目的

学校教育臨床をはじめとする青年期の心理臨床場面において、家族関係への援助を行うことは極めて多い。例えば酒井・菅原・眞榮城・菅原（2002）は、中学校段階の親子関係が学校適応に影響を及ぼすことを指摘している。また丹羽（2005）は、大学入学という環境移行期のストレス状況における対人不安と孤独感が、親への愛着によって緩衝されることを明らかにした。さらに青年期にあっては、自我同一性の確立にかかわって、親からの情緒的独立を果たす試みを行うことが発達の特徴としてあげられる（吉田・山内，2001）ため、それまでの親子間が抱えてきた問題をあらためて検討する時期に差し掛かることが指摘できる。加えて、心理臨床場面においては親子がともに面接に訪れることも多く、必然的に家族関係への援助が求められる。このように、家族関係をめぐる問題は心理臨床の大きな課題と考えられることから、そのアセスメント方法がいくつか提唱されている。それは質問紙法、投影法、観察法など多岐にわたるものの（鈴木・小川，2000）、青年期にあっては、その親に対する両価的態度の特徴から、回答への態度がテスト結果に反映しにくい投影法が有効であるとされる（小川・松尾，2000）。しかし、大熊（1988）が指摘するように、わが国における家族アセスメントへの関心は必ずしも高くなく、その方法も十分に確立されているとはいえないため、早急な実証的研究の蓄積が求められている。

* 愛知教育大学

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

ところで、この親子関係をアセスメントする投影的手法の一つとして、「円環イメージ画」がある（Figure 1）。これは、幼い頃の母と子に見立てた2つのイメージ円を描くことで母子関係イメージを把握する方法で、松尾・小川（1998）によって提唱されている。この方法の特徴としてあげられるのが、母親の存在の大きさをあらわす「円の大きさ」や、関係の緊密さやつながりの深さをあらわす「円の包摂」といった独自の観点を備えていることである（松尾・小川，1999a）。これらを数量的に検討した小川・松尾（2000）によれば、中学生は大学生よりも自分のイメージ円を母親のイメージ円の上に描くことが多く、約半数が母親と自分の円を独立した横並びに描いていること、共感性が高いほど2つのイメージ円を近くに描くことなどの特徴があるという。

また、円環イメージ画は幼少期にとどまらず、現在の母子関係を把握するためにも援用されている。例えば宮本・佐藤・北本（2001）は、女子大学生を対する調査から「幼い頃」と「現在」の円環イメージ画の結果と内的作業モデルとの関連を検討し、現在の方が母と子のイメージ円が離れる傾向にあることを見出している。さらに萩原・五十嵐（2004）は、父子関係にも適用を試み、自分が父親よりも上で大きい存在であるとイメージしている中学生は、幼少期の愛着に対して否定的に感じていることを指摘した。

以上のように、円環イメージ画は比較的新しく提唱されたアセスメント方法だが、次第に変法が導入されて親子関係理解のさらなる発展を遂げていると言えよう。ところが、これまでの

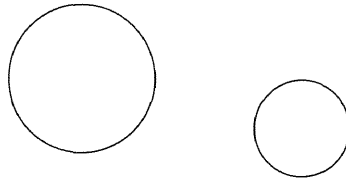


Figure 1 円環イメージ画の例

研究では、その描画を行うことを拒否した者の特徴についてはいずれも報告がなされていない。言語的投影法であるロールシャッハ法においては、反応拒否の増大が、防衛機制における抑圧の不全もしくは不安定を示す指標となることが指摘されている（小此木・馬場，1989）。特に、描画を用いる投影法にあっては、描画を拒否する自由が認められており、ここから描画拒否の意味を検討する必要がある。加えて、集団実施法を用いた描画では、個別実施状況に比べてさらに多くの「描画しない」結果が散見されることが予測される。

そこで本研究では、円環イメージ画の描画拒否の意味を検討するために、集団実施場面における描画遂行状況を明らかにし、その状況と親子関係の特徴との関連を明らかにすることとした。対象者は、広く青年期の特徴を把握するために中学生と大学生とし、円環イメージ画については、現在の母子・父子のイメージ円を描く課題を課した。また親子関係の特徴については、五十嵐・萩原（2004a；2005）、萩原・五十嵐（2004）、宮本・佐藤・北本（2001）で蓄積されてきた点を踏まえ、親子の愛着関係の視点から検討することとした。

2. 方法

(1) 対象

円環イメージ画について、描画の失敗による不備を描画拒否と区別し、あらかじめ除外する必要があるため、家族構成において父母のいずれかが「いない」と回答した者を分析から除外することとした。さらに、明らかな描画失敗と考えられるような記述（例えば「書けません」「わかりません」等）が認められる者も、分析から除外した。その結果、分析の対象となった

のは、中学生では、A 県内の 2 つの公立中学 1～3 年生 422 名（男子 236 名、女子 184 名、不明 2 名）であった。大学生では、B 県内の大学 1～4 年生および C 県内の短期大学 1 年生の計 260 名（男子 142 名、女子 117 名、不明 1 名）であった。平均年齢は、中学生で 13.79 ± 0.85 歳、大学生で 18.61 ± 1.06 歳、全体で 15.63 ± 2.53 歳であった。

(2) 内容

フェイスシートで性別、年齢、学年、家族構成について尋ねた後、母子円環イメージ画と父子円環イメージ画の描画、および親への愛着を測定する質問紙への回答を求めた。

母子円環イメージ画については、松尾・小川（1998；1999b；2000）、小川・松尾（2000）を参考に、「今のあなたにとって、お母さんはどんな存在であり、お母さんと一緒にいるとどんな感じがしますか？イメージして、それを二つ（あなたとお母さんの一つずつ）の円であらわしてください。」と教示した。父子円環イメージ画についても同様に、父親を思い浮かべてもらうよう教示した。

親への愛着については、佐藤（1993）を一部改変した五十嵐・萩原（2004b）の 18 項目を用いた。「安心・依存」「分離不安」「不信・拒否」の 3 因子構造であり、「あてはまる」～「あてはまらない」の 5 件法を用いた。

(3) 調査時期と手続き

中学生については、2003 年 2 月中旬～下旬に各学級で学級担任が一斉に実施し、その場で回収された。大学生については、2007 年 6 月中旬～下旬に講義内で授業担当者が一斉に実施し、その場で回収された。いずれも無記名であ

り、プライバシーは保護されること、結果は個人が特定される形で公表されないことが説明された。

3. 結果

(1) 円環イメージ画の描画遂行状況

描画遂行状況について、その出現率を検討したところ、描画を行った者（描画群）は 474 名（69.50%）、描画を拒否した者（拒否群）は 208 名（30.50%）であった。性差を検討したところ、有意な結果は得られなかった（ $\chi^2=5.9$, $df=1$, $n.s.$ ）。

(2) 母子円環イメージ画の描画遂行状況と母親への愛着との関連

次に、母子円環イメージ画の描画遂行状況と、母親への愛着との関連を検討するために、描画遂行状況を要因とする 1 要因分散分析を行った（Table 1）。その結果、「安心・依存」において有意差が認められ、描画群の得点が高いことが示された。

さらに、個々人が有する愛着のタイプによって、描画遂行状況に差が見られるかを検討することとした。愛着のタイプ分類は、まず、1 つの下位尺度得点－（残り 2 つの下位尺度得点の和/2）>0 であれば、ある下位尺度得点が残りの下位尺度得点よりも個人内で優位であり、その愛着型を有しているとした。これらの基準に則り、安心型、不信型、分離不安型の 3 つの愛着タイプを抽出した。加えて、複数の下位尺度得点が優位である場合は、それらの混合型の型を

有していると考えて別に抽出した。まず「安心・依存」と「分離不安」のいずれもが優位な者は、親との一体感を伴う愛着関係を形成していたと考えられるため、密着型と命名した。また「安心・依存」と「不信・拒否」のいずれもが優位な者と、「不信・拒否」と「分離不安」がいずれも優位である者は、親に対する両価的な愛着を有している者であると考えられるため、アンビバレント型と命名した。

以上のタイプ分類と描画遂行状況によるクロス集計を行い、その出現率を検討するためにカイ二乗検定を実施した（Table 2）。その結果、有意傾向が認められた（ $\chi^2=8.55$, $df=4$, $p<.10$ ）ため、調整済み残差による検定を行ったところ、分離不安型では拒否群の出現率が有意に高いこと（ $p<.05$ ）が、不信型では拒否群の出現率が有意に高い傾向にあること（ $p<.10$ ）が示された。

(3) 父子円環イメージ画の描画遂行状況と父親への愛着との関連

父子円環イメージ画についても、同様に描画遂行状況を要因とする 1 要因分散分析を行った（Table 3）。その結果、「安心・依存」において有意差が認められ、描画群の得点が高いことが示された。

また、同じ手続きで父親についても個々人の愛着のタイプを抽出し、描画遂行状況とのクロス集計を実施して出現率を検討した（Table 4）。その結果、有意差が認められた（ $\chi^2=9.94$, $df=4$, $p<.05$ ）ため、調整済み残差による検定を行っ

Table 1 描画遂行状況による母親への愛着の差

	描画群		拒否群		F 値 遂行状況
	M	(SD)	M	(SD)	
安心・依存	3.63	(.88)	3.38	(.88)	11.00 ***
不信・拒否	2.78	(.90)	2.84	(.87)	.57
分離不安	2.48	(.94)	2.41	(.92)	.79

*** $p < .001$

Table 2 描画遂行状況と母親への愛着型との関連

		描画群	拒否群
安心型	<i>n</i>	192	71
	調整済み残差	1.24	-1.24
不信型	<i>n</i>	57	35
	調整済み残差	-1.89	1.89
アンビバレント型	<i>n</i>	125	52
	調整済み残差	.11	-.11
分離不安型	<i>n</i>	7	8
	調整済み残差	-2.03	2.03
密着型	<i>n</i>	83	30
	調整済み残差	.80	-.80

Table 3 描画遂行状況による父親への愛着の差

	描画群		拒否群		<i>F</i> 値 遂行状況
	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	
安心・依存	3.27	(.95)	2.98	(.92)	13.15 ***
不信・拒否	2.82	(.91)	2.87	(.87)	.35
分離不安	2.31	(.88)	2.23	(.85)	1.20

*** $p < .001$

Table 4 描画遂行状況と父親への愛着型との関連

		描画群	拒否群
安心型	<i>n</i>	165	58
	調整済み残差	1.61	-1.61
不信型	<i>n</i>	94	61
	調整済み残差	-2.89	2.89
アンビバレント型	<i>n</i>	125	54
	調整済み残差	-.05	.05
分離不安型	<i>n</i>	11	5
	調整済み残差	-.11	.11
密着型	<i>n</i>	71	22
	調整済み残差	1.45	-1.45

たところ、不信型で拒否群の出現率が有意に高いこと ($p < .01$) が示された。

(4) 円環イメージ画の描画遂行状況と父母への愛着のズレとの関連

以上は母子間と父子間の関係に注目してきたが、これら三者間の関係性にも焦点をあてる必要がある。そこで、母への愛着と父への愛着にズレがある場合を取り上げ、それと円環イメージ画の描画遂行状況との関連を検討することと

した。ズレの大きさの分類は、以下の方法で行なった。まず、愛着の下位尺度ごとに父親と母親の下位尺度得点差を算出し、それを絶対値化して下位尺度ごとのズレ得点を算出した。次に、その下位尺度ごとにズレ得点の平均値を算出し、平均値よりズレ得点が高い場合を父母ズレあり群、小さい場合を父母一致群とした。さらに、父母ズレあり群については、父母のどちらの得点が高いかによって母>父群と母<父群に分類した。また父母一致群については、それぞれの下位尺度得点とその平均値よりも父母ともに高い場合を父母一致高群、ともに低い場合を父母一致低群として分類した。

これらの基準に則って分類された愛着のズレについて、愛着の下位尺度ごとに円環イメージ画の描画遂行状況とのクロス集計を行い、その出現率を検討するためにカイ二乗検定を実施した。

まず「安心・依存」については Table 5 に示した。出現率に有意差が認められた ($\chi^2=13.87$, $df=3$, $p<.01$) ため、調整済み残差による検定を行ったところ、父母一致高群は有意に描画群の出現率が高く ($p<.001$)、父母一致低群は拒否群の出現率が有意に高い傾向にある ($p<.10$) ことが明らかとなった。

「不信・拒否」(Table 6)、「分離不安」(Table 7) についても同様に検討したが、出現率に有意差は認められなかった。

4. 考察

本研究は、集団実施状況の中で出現した「円環イメージ画を描画しない」という事象について、特に描画拒否と考えられるものを抽出した上で、愛着との関連から母子・父子関係の特徴を探ることを目的とした。描画ならびに質問紙調査への参加は任意であることや、集団実施状況ではうまく描画表現ができないなどの理由のために「描画しない」という選択枝も生じやすくなることから、描画拒否の出現状況は高くなることが予測される。実際、本研究では、描画失敗を除いた描画拒否を行った人数は 208 名で、分析対象者の 30.50% という高率を示した。そ

れだけに、描画拒否の示す意味は多様であることが予測され、必ずしも描画拒否が心的様相の投影であるとは言い切れない面がある。そうした限界を踏まえる必要があるものの、本研究の結果は以下のような可能性を示す興味深いものであった。

まず、母子円環イメージ画の結果からは、拒否群は母親への安心・依存感が有意に低いことが示された。また、不信感の強い愛着タイプや、確固たる信頼感がないために生じると考えられる分離不安の強い愛着タイプは、拒否群に有意に多く出現することが認められた。この結果は、ほぼ父子円環イメージ画においても共通している。したがって、円環イメージ画を描かないということは、父母に対する安定した愛着関係の形成不全を意味する可能性がある。

円環イメージ画に類似した家族アセスメント法として提唱されている「円家族図」について、上原・竹内 (1999) は、絵の得手不得手に関係しないため、比較的抵抗なく実施できる一方、その作業内容は抽象度が高く、遂行は容易ではないことを指摘している。つまり、円家族図は通常の家族図とは異なり、描画の物理的制約を踏まえた描画を行う必要が生じ、意図的あるいは無意図的に様々なイメージ (円の大小や重なりなど) を用いた描画を産出する必要がある、とされる。このことは、円で家族を描く際に、描画者が意識している面とそうではない面の双方から、自らの家族関係への直面化を強いられるということの意味すると考えられる。したがって、円環イメージ画の描画拒否を行うことは、そうした直面化を避ける効果があると考えられ、その背景に親への安心感の伴う愛着の欠如が示唆される。

さらに、このような父子・母子関係の様相については、父母への愛着のズレという観点からの分析結果からも同様に示唆された。すなわち、父母への愛着のズレの問題は、描画を拒否したか否かに関連はなく、むしろ父母に対して一致して「安心・依存」が低い場合に描画拒否が生じやすく、高い場合に描画を描きやすいということが明らかになった。これはつまり、父母い

Table 5 描画遂行状況と
「安心・依存」の父母間のズレ得点との関連

		描画群	拒否群
母>父	<i>n</i>	259	117
	調整済み残差	-.85	.85
母<父	<i>n</i>	41	21
	調整済み残差	-.73	.73
父母一致高	<i>n</i>	93	18
	調整済み残差	3.45	-3.45
父母一致低	<i>n</i>	54	34
	調整済み残差	-1.95	1.95

Table 6 描画遂行状況と
「不信・拒否」の父母間のズレ得点との関連

		描画群	拒否群
母>父	<i>n</i>	112	49
	調整済み残差	-.19	.19
母<父	<i>n</i>	139	59
	調整済み残差	.02	-.02
父母一致高	<i>n</i>	83	46
	調整済み残差	-1.61	1.61
父母一致低	<i>n</i>	122	40
	調整済み残差	1.65	-1.65

Table 7 描画遂行状況と
「分離不安」の父母間のズレ得点との関連

		描画群	拒否群
母>父	<i>n</i>	136	50
	調整済み残差	1.28	-1.28
母<父	<i>n</i>	35	18
	調整済み残差	-.56	.56
父母一致高	<i>n</i>	132	58
	調整済み残差	.01	-.01
父母一致低	<i>n</i>	165	80
	調整済み残差	-.89	.89

ずれかに対して安心感が持てなくとも、一方に対して安心感を有しているのであれば、家族関係を直視して描画を産出できるだけの状態が保たれているということを示唆すると言えよう。しかしながら、この点に関しては、他の投影的

家族アセスメント法である家族関係単純図式投影法や、家族イメージ図法などと同様、家族機能（草田，1996）や家族システム（中野・亀口，1992），家族コミュニケーション（草田・山田，1998），家族問題解決パターン（茂木，1997）

など、多くの他の家族関係変数との関連を実証的に検討する必要がある。

このように、円環イメージ画の描画拒否は、親子間の愛着を認識してそれを表現する際に生じる、「家族関係への直面化」の回避という問題が背景にあることが示唆された。ただし、本研究の結果は、あくまでも集団実施状況で得られたものであり、個別実施場面、および心理臨床面接場面への解釈適用には慎重にならなければならない。個別実施場面や心理臨床場面では、調査実施者あるいは面接者（査定者）と、描画者との関係性の問題等によっても拒否が生じる可能性があり、一般的には集団実施状況よりも描画拒否をしにくいと考えられる。したがって、自ずからそこでの描画拒否の意味は、本研究の結果とは異なってくるものと推察される。ただし、円環イメージ画に類似した「円家族図」について、上原・竹内（1999）は、集団実施状況は様々な家族の様相に触れる可能性が生じるため、情緒的な発達特徴とその成長促進援助を考えれば、青年期には集団実施状況がのぞましいという見解を示している。こうした指摘も踏まえ、今後は、様々な実施状況での描画拒否の出現状況の比較を通し、それが意味する心的動動状態を詳細に検討していく必要がある。

引用文献

- 萩原久子・五十嵐哲也 2004 中学生における親子関係イメージと幼少期の愛着(2)—円環イメージ画による父子関係の検討 日本心理臨床学会第23回大会発表論文集, 288.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004a 中学生における親子関係イメージと幼少期の愛着(1)—円環イメージ画による母子関係の検討 日本心理臨床学会第23回大会発表論文集, 287.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004b 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2005 中学生における親子関係イメージと幼少期の愛着(3)—円環イメージ画における父母間のズレに注目して— 日本心理臨床学会第24回大会発表論文集, 276.
- 草田寿子 1996 家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅲ—家族図式に表現された中学生の家族関係パターン— カウンセリング研究, 29, 208-216.
- 草田寿子・山田裕紀子 1998 家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅳ—家族図式に表現された高校生の家族関係パターンと家族コミュニケーションとの関連 カウンセリング研究, 31, 10-18.
- 松尾和美・小川俊樹 1998 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(1) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 278.
- 松尾和美・小川俊樹 1999a 母子関係のアセスメント：展望 筑波大学心理学研究, 21, 179-185.
- 松尾和美・小川俊樹 1999b 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(2)—「幼いとき」と「現在」の母子関係をあらす二枚のイメージ画の比較から— 日本心理学会第63回大会発表論文集, 880.
- 松尾和美・小川俊樹 2000 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(3)—イメージ円の関係にあらわれる母親との心理的距離について— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1075.
- 宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香 2001 女子大学生の内的作業モデルと家族表象—家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として— 東海女子大学紀要, 21, 67-77.
- 茂木千明 1997 家族関係単純図式投影法による健康な家族関係—予備的研究— 仙台白百合女子大学紀要, 創刊号, 135-143.
- 中野まり・亀口憲治 1992 思春期の子どもとその両親の家族イメージ—臨床群と非臨床群の比較を通して— 福岡教育大学紀要第4分冊, 41, 283-290.
- 丹羽智美 2005 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, 13, 156-169.
- 小川俊樹・松尾和美 2000 現代中学生のもつ

- 母子関係イメージの検討—円環母子関係イメージ画法を用いて— 研究助成論文集, **35**, 80-89.
- 小此木啓吾・馬場禮子 1989 精神力動論—ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合 金子書房
- 大熊保彦 1988 家族アセスメント 岡堂哲雄(編) 講座家族心理学第6巻 家族心理学の理論と実際 金子書房 pp173-193.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 佐藤朗子 1993 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, **40**, 215-226.
- 鈴木久美子・小川俊樹 2000 家族凝集性からみた家族アセスメント尺度：展望 筑波大学心理学研究, **22**, 227-234.
- 上原明子・竹内和子 1999 「円家族図」の適用 大阪成蹊女子短期大学研究起用, **36**, 29-39.
- 吉田甫・山内光哉 2001 青年期の特色 山内光哉(編) 発達心理学下 青年・成人・老年期 ナカニシヤ出版 pp23-37.

Attachment for parents among adolescents
who refuse to draw images of parent-child relationship projected on two circles

Tetsuya IGRASHI
Ichiko SHOJI

The present study focuses on attachment for parents among adolescents who refuse to draw images of parent-child relationship projected on two circles. Draw Circles Method is a projective technique for understanding subject's images of parent-child relationship from their drawing two imaginative circles likened father-child or mother-child relationship to. 422 junior high school students and 260 undergraduates were analyzed.

As a result, adolescents who refused to draw DCM felt insecure for parents, and had the distrustful or separation anxiety attachment style. Adolescents were made to confront their parent-child relationship by drawing DCM. Therefore, it is suggested that adolescents who refuse DCM avoid confrontation to their parent-child relationship, because their attachments were insecure. Moreover, adolescents who refuse DCM had insecure attachment for both father and mother. It is suggested that adolescents can confront their parent-child relationship, if they had secure attachment for only one parent.